郷土アルバム

猫又退治 (一)

池田嘉一

食谷地区の大字中ノ俣は、むかしは桑取谷のなかまでした。標高二〇〇〇㍍近い所にあって、山に囲まれた谷あいの部落です。今から二八〇年前の一六八三年（天和三）に、この村の吉十郎という勇士が、猫又（ねこまた）という恐ろしいけものを退治（たいじ）した話があります。

× ×

この年の二年前の八一年（天和元）に、高田城主であった松平越後守光長の家、通称越後家が没落して幕府領となり、代官が高田に派遣されました。その年の冬は五㍍も雪がつもって、「この下に高田あり」という立札が建てられたといわれています。その翌年の夏桑取谷中ノ俣地内の莫倉山の通り峯という所に、猫又が住みつきました。昔は富士山にいたが、そこにいられなくなり、信州戸隠山に移り、それから中ノ俣に来たのだそうです。猫又は毎夜村に出て、うるしをかいてからだに塗り、浜へ出ては塩砂を塗りこんで、鉄石のように身を固めました。

× ×

ある日、中ノ俣の乙松という二二才の青年が、池ノ原という所へ竹の子取りに行って帰らなくなりました。うちの者が探しに行ったところ、池ノ原に乙松の左の手首が残っていました。きっと大くまのしわざだろうと言い合いました。

翌八三年五月二十八日に、村から半道ばかり離れた竹取という所で、村の甚兵衛という四三才の男がやられました。六月一日には村に近い角間という作場で、甚兵衛の弟与平治がおそわれました。与平治がかまをふるってかくとうしたので、村人がその音を聞きつけやり、とび口などを持ってかけつけたところ、恐ろしいけものが与平治の死がいをせなかにのせて、そ猫又だ」と言い合いました。与平治はまだ三八才の若者でした。

× ×

それからというものは、村人たちは作場へも出られず、七ツどき（午後四時）ごろから雨戸をしめるというありさまでした。しかしこのままではいられません。庄屋は村人と相談したすえ、強い若者数人に、ぼうややりを持たせて高田城下につかわし、このことを代官に注進しました。

代官岡登（おかのぼり）次郎兵衛は、「近日中に狩り取ってやろう」と言ったので、使者たちは村に帰ってその事を伝え、一同その日の来るのを待っていました。

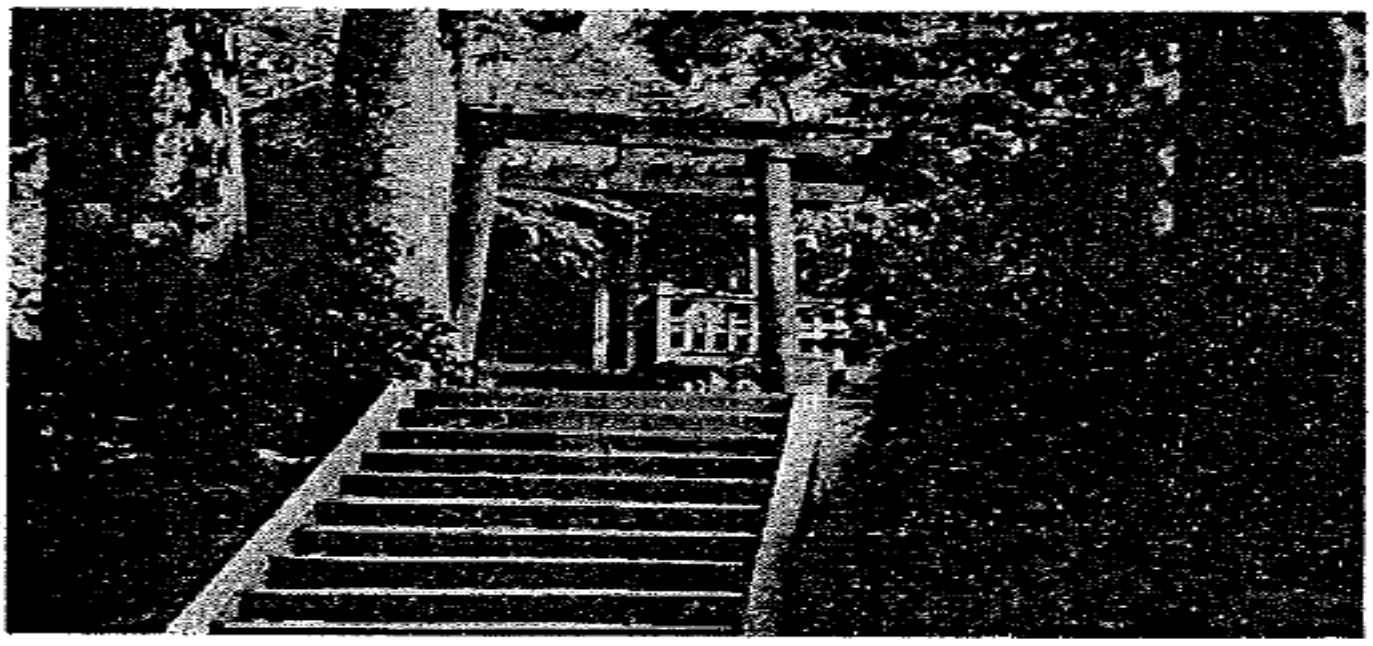
× ×

代官岡登次郎兵衛・八木仁兵衛両人は、旧高田領お仕置き役人たちと評議したあげく、足軽五〇人に、弓・やり・鉄砲・なぎなたを持たせて派遣しました。また桑取谷の大肝煎（おおきもり）にフレを出させ、谷じゅうの人足七〇〇人余、中ノ俣村は一五才以上六〇才までの男三三〇人、総勢一千人余が手に手に、ぼう・やり・とび口・かま・まさかりなどを持ち、六月六日・七日両日のうちに討ち取るべしと、六田に莫倉山を登り谷を残らずたずねまわりましたが、猫又があらわれませんでした。

村で相談して、神主に、氏神様に祈祷をしてもらったところ、その夜「われ明日トンビとなって現われ、かのけもののいる下に舞うべし」という神様のお告げをゆめ見た者が大ぜいいました。

翌七日あけ六ツ（朝六時）から千余人がしたくを整え、神の告げに喜び勇んで出発しました。頭役人が「手勢を三手に分け、一手は西又道草刈より、一手は東巻の峯より海船坊へ、いま一手は中の谷の道より、それがしども狩り入るべし、急げ、急げ」と号令したので、三手に分かれて進みました。

中の道は庄屋が案内しました。左右の峯では、陣貝・陣だいこを鳴らしました。海船坊の西に、木の芽とおげという所があります。ふと見ると、とおげの上にトンビが舞っていました。「それッ」と一同、三方からかけつけると、はいっさんに奥山へ逃げていくのが見えました。村人たちは「あれこそ猫又だ」と言い合いました。



中ノ俣の氏神様

たして猫又のねているのが見えました。一同大声をあげて近よると猫又はすっくと起き上りました。大きな目をいからせ、爪をとぎ、歯を鳴らし、びくとも動かない。一同たじたじとしりごみするばかりです。役人衆に「弓鉄砲を頼みます」というと、「ここではダメだ、作場へ追い出せ」といって、足軽五〇人を三手に分けてかまえ「追い出せ、追い出せ」と下知（げち）するだけで、猫又へ近づこうとしません。村人たちがしかたなく、両方から追い出そうとするが、猫又はびくとも動きませんでした。

庄屋は役人の前に進み出て「このような方法では、とても討てません。当村に吉十郎という、早わざ衆にすぐれ、大力無双の者がおります。病気で、これへまいっておりませんが、この者に討ち取らせるよりほかございません、さっそく呼びよせたらいかがでございましょう」と申し上げました。役人は大いに喜んで、すぐに使いの者を村へ飛ばしました。（以下次号）